

昭和初期における波照間島の織物（聞き書き）

與那嶺 一 子

はじめに

波照間島の近年における衣生活や織物の詳細を記載した文献は殆どみられない。八重山の島々の中でも交通事情が悪かった事、また他島と比較して特徴のある織物がみられなかった事がその要因と考えられる。

今回の調査では、戦前から戦後にかけて島にどのような織物あったのか、主に技術面の聞き取りを行った。語り手の方々が、大正6年～15年生と同世代であったので、昭和の戦前期を中心に戦後30年代までの様子を聞き書きという形で報告することにした。

史料にみる波照間の織物

波照間島の染織については、『李朝実録』中の「成宗康靖大王実録」（1477年）（注1）と王府時代の貢布関係史料（注2）が残されている。

「成宗康靖大王実録」には「門伊島（与那国）と同じ」（注1）と述べられ、織物素材としての「苧」、染料としての「青藍」、箴と杼のある機が、波照間島にも存在していた事が推察される。貢布関係史料からは、木綿、芭蕉、藍等の植え付けが政策的に指導奨励され（注3、4）、また貢布が織られるまでの手順やそれに関わる道具、役職等が細かに取り決められていた様子が分かる（注5、6）。また、白上布、中布、下布、紺島上布、赤島上布といった貢布があったことも分かっている（注5）。

しかし、旧慣移行期以後の波照間の織物に関する報告が無いため、両史料が波照間の織物と実際にどう繋がるのか明らかにできない部分がある。しかし、今回の調査で、空白部分を埋めることができた。

波照間島の織物の概要

波照間島では前述の記録から1400年代既に機や苧布が存在した事は知られている。また、『李朝実録』中の「明宗



（写真1） 波照間島の糸芭蕉

実録」(1546年／注7)からも、早い時期に芭蕉布が織られていた事は考察できる。今回の調査で、昭和初期には芭蕉(写真1、注8)、苧麻(写真2、注9)に加えて、絹(写真3)も繊維素材として使われていた様子が分かった。沖縄県では明治30年代から養蚕が奨励され、各市町村への巡回指導が行なわれている。大正期には第一次大戦の影響で価格が暴騰し、県内各地で養蚕業が盛んになる(注10)。その影響が波照間島にも及びそれが戦後も再開し昭和30年代まで続いていた事が聞き取れた。芭蕉はどの家庭でも織られており、普段着として着用されている。その反面、苧麻は芭蕉に比較して糸作りが安易であるにも関わらず織物として使われていない例が見られる。また、貢布関係資料(注5)や明治25年の統計(注11)に掲載されている木綿布に関する事は確認できなかった。

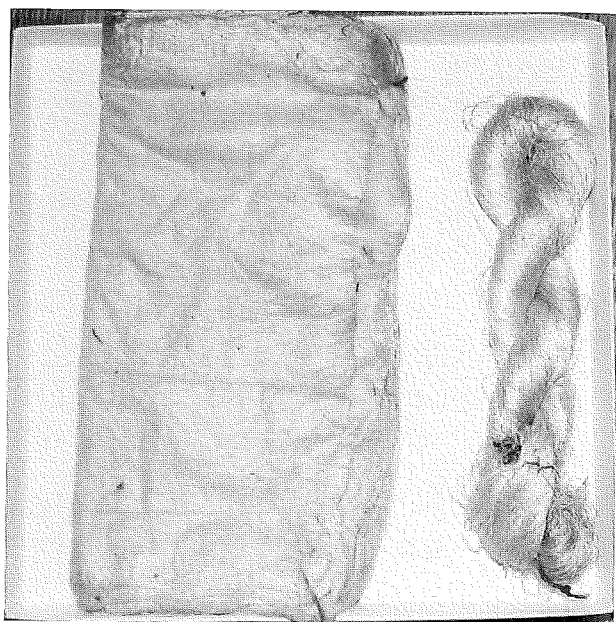
染料には当時みやこ染(注12)の染料が普及していたが、黄色や茶色は島内のフクギ(写真4、注13)やヤエヤマアオキ(注14)等の植物によって染められていた。媒染(注15)として灰汁や田泥が使われていた事や海晒し(注6)についても確認できた。藍は葉の大きな「トウ藍」(注16)と豆科植物による「台湾藍」(注17・写真5)の二種類の存在が確認できた。

織物の模様は縞模様(経縞、緯縞、格子)(写真6)が殆どで、緋を織る経験者は少なく、聞き取り及び実物から緋模様は極めて簡潔なものであったことが分かる(写真7)。

織機については、地機(図1、写真8)から高機(図2)への移行時期がおおよそ大正期と推定される。昭和初期、高齢者(語り手の祖母等)は地機を使用しているが、語り手の



(写真2) 波照間島の苧麻(カラムシ)



(写真3) 昭和初期に繰糸された絹糸と真綿



(写真4) フクギ



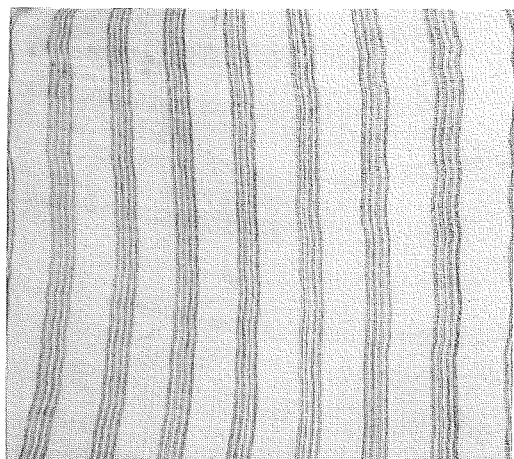
(写真5) 「台湾藍」

母親や本人達の頃から高機が主流となっている。整経に使用される「工」型の道具（注18・図3）について記憶している語り手が二人おり、杵型の整経台（注19・図4）に替わるのも高機移行時期と重なるものと思われる。

これらの織物に関する道具類は、戦時中の疎開によって、その大半が失われている。また戦後、経済事情が良くなるに連れて衣類が入手し易くなり、手作業による織物従事者が減少し現在に至ったことを書き加えておきたい。

今回の調査で、聞き取り以外に8領の衣装、2点の箆（写真11）、裂3点及び櫛状の資料（注20、写真9）が確認されたが、その詳細報告については別の機会としたい。

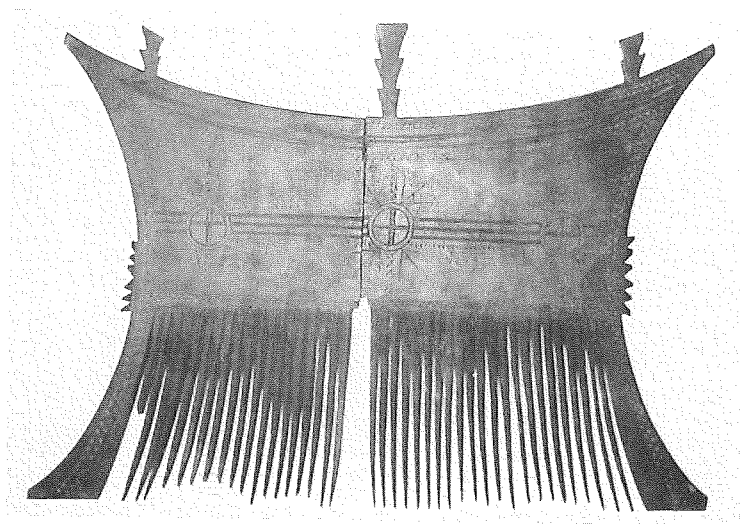
快く調査をお引き受け下さいました波照間島の皆様と、ご教示頂きました新垣幸子氏、柳悦州氏に感謝申し上げます。



(写真6) 縞模様の織物（本比田トヨ氏蔵）



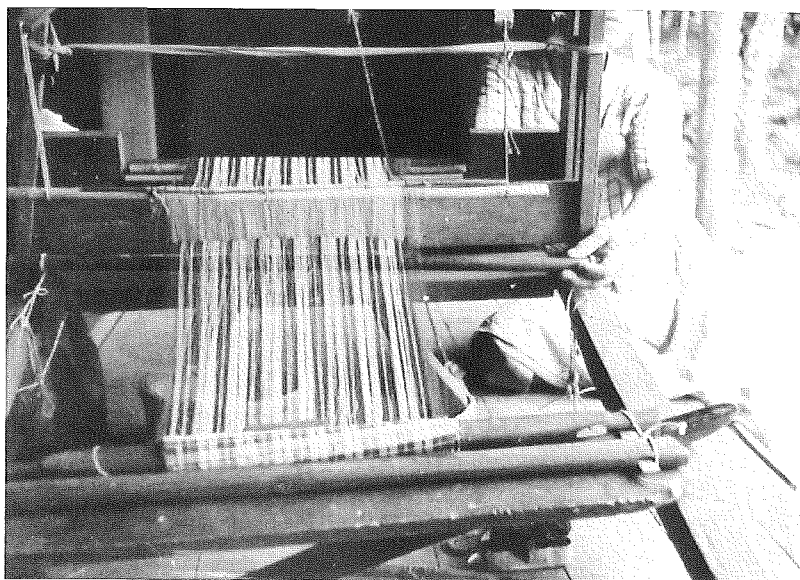
(写真7) 縞模様の着物（石野久子氏蔵）



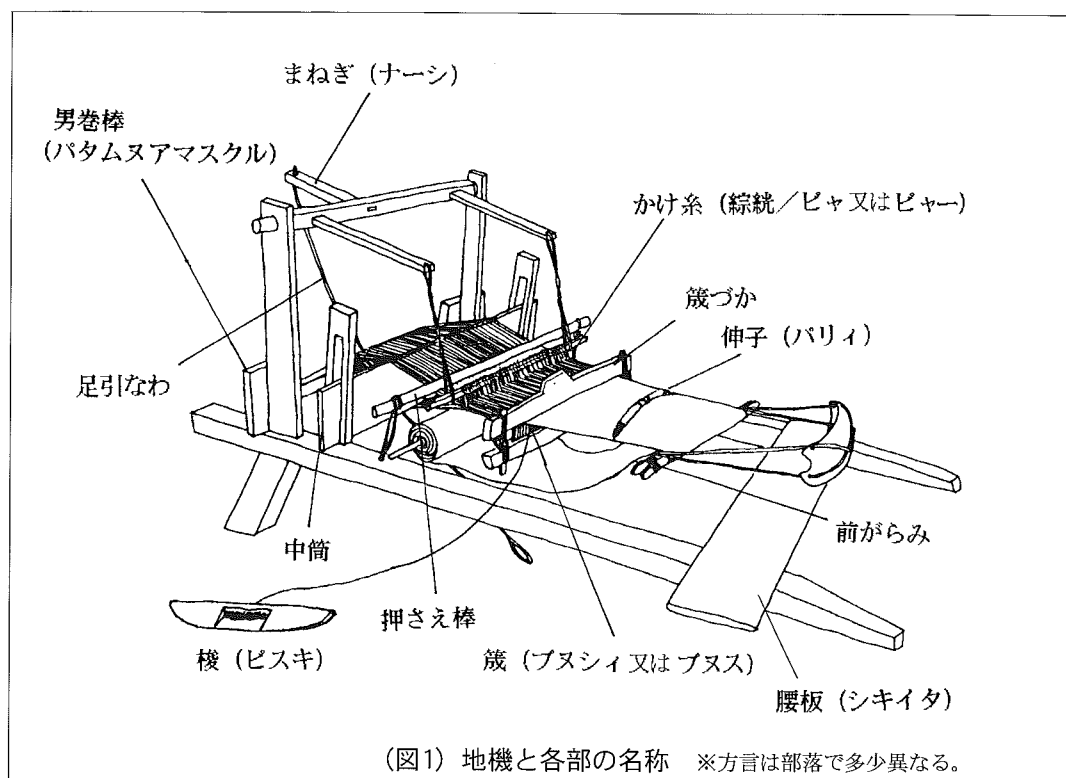
(写真9) 櫛状の資料

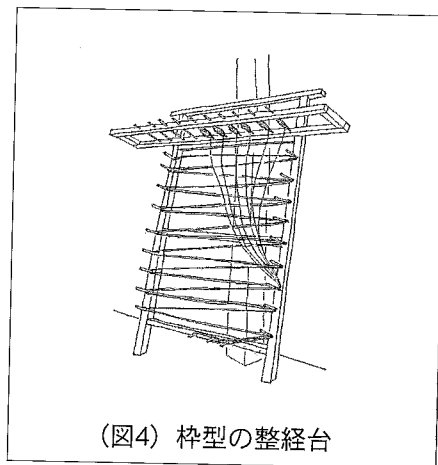
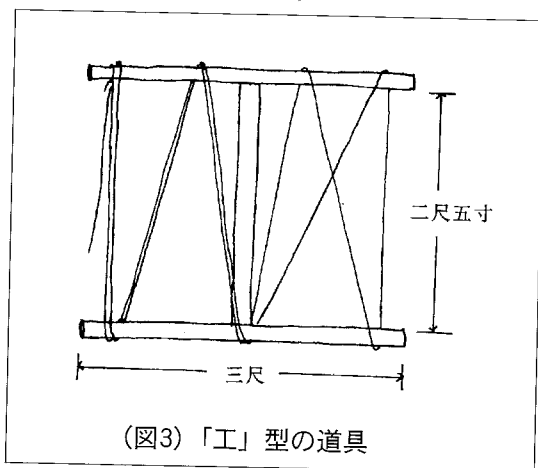
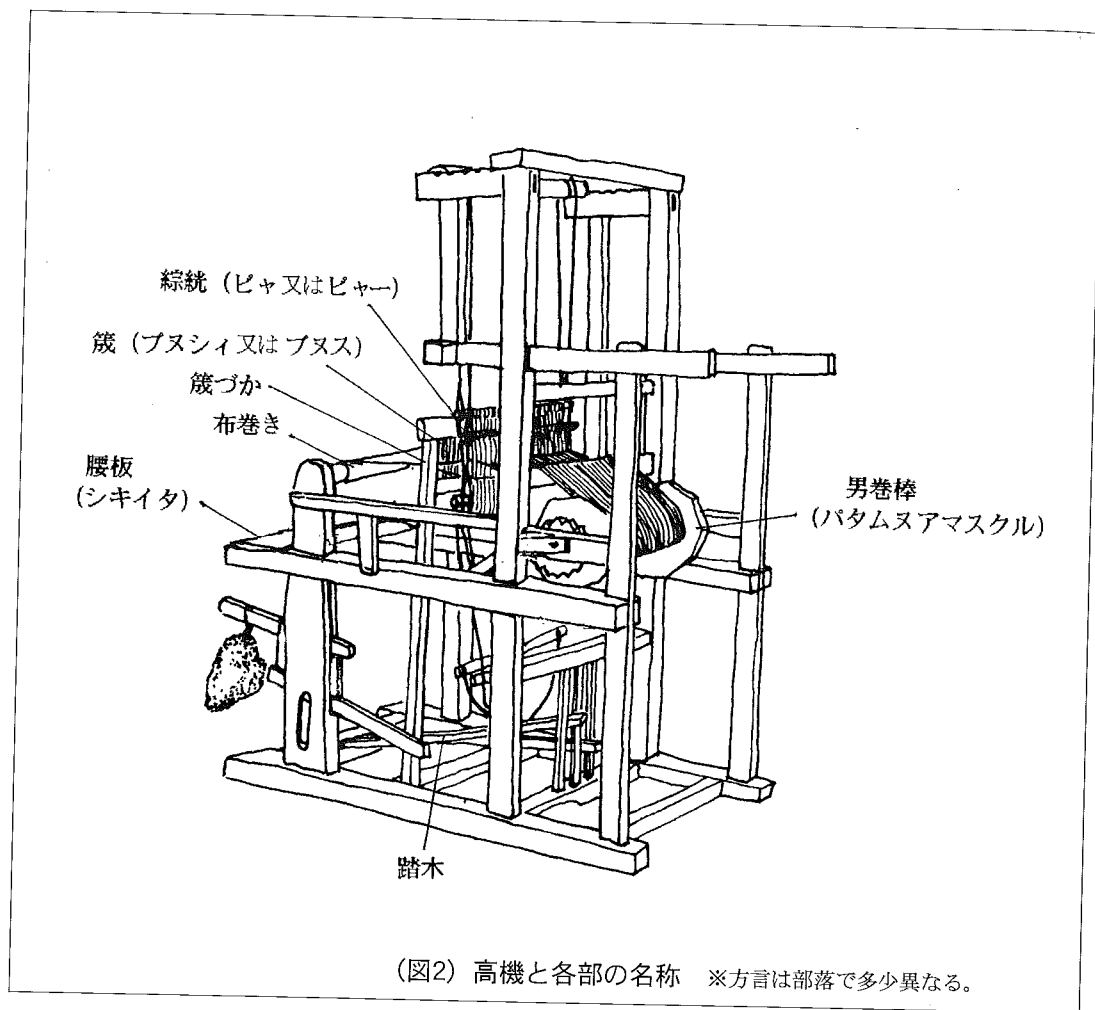
凡例

- 聞き取りは質問形式で行われたが、忠実な逐語的再現は行わず、整序の手続きを加えながら、問わず語りの形に構成した。
- 文体は各々の語り手の口調に合わせた。方言語彙または民俗語彙として扱った言葉には、原則として表音的な仮名標記を施した。
- 語り手の方々の芳名には敬称を省略した。集落名は本人が現在居住している所である。
- 聞き取りは平成9年9月17日・18日に行ったものである。



(写真8) 波照間島の地機 (1960年頃)





聞き書き 1 (本比田トヨ：大正13年生／富嘉部落)

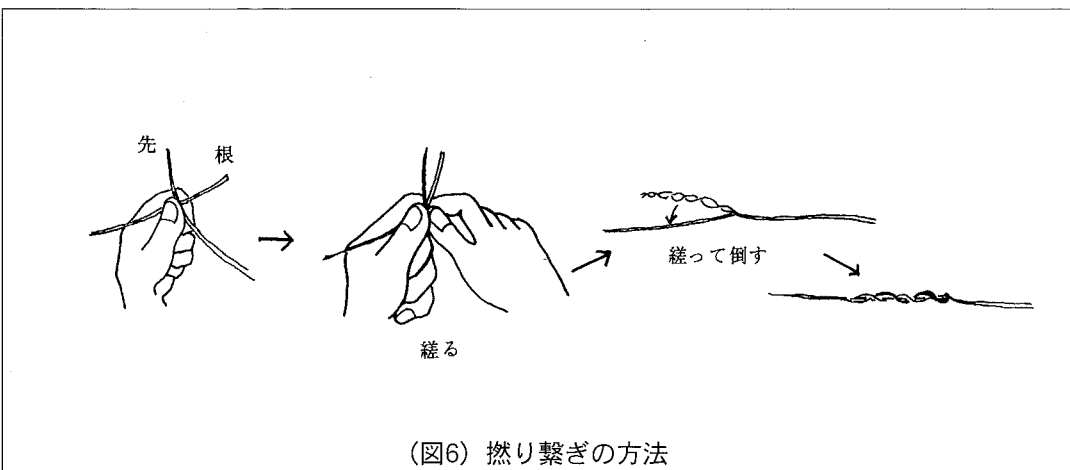
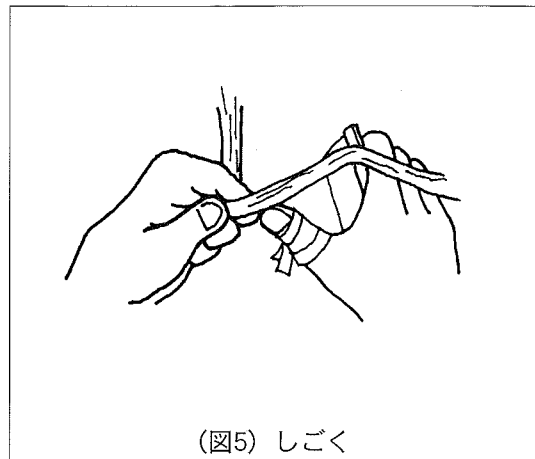
小さい頃は機織はやっていない。機織りを始めたのは、高等科（注20）を卒業した15、16歳頃と思う。本格的には20歳頃から始めた。

戦後も少しは機織りもやったよ。芭蕉も蚕もやったけれど、働かんと食われない時代だから、機織りだけはできないと言ってやめてしまった。

うちの婆さん（実父の母親）が使った地機や道具があったから、それを使った。婆さんは地機で織られていた。いつ頃から高機になったかは分からないが、私は崎枝の婆さんから機織りを習って、最初から高機だった。

芭蕉は屋敷の中ではなく、畑のあちこちに芭蕉が植えられていた。今は土地改良で無くなっているが、村用地だったか、自然に生えていた。1m50cmぐらいになると刈る。刈り取りは、夏だったと思う。皮を剥いて、束にして、鍋に入れて炊いて、翌朝になると冷えるので、翌日はそれをしごいた（注21、図5）道具は屋久貝と言っていた。昔は芭蕉の外側ははいて捨てた（注7）。真ん中だけを使って着物を織った。

糸なす時は、手が滑べるので、灰を少し持って来てからやったよ。ブー（苧麻／注22）をやったみたいに、糸の先と後をねじって繋いだ（図6）。結んだことは無い（注23）。竈の灰もやる時はやったけど唾もやったよ。うちの婆さんは、茶碗に少し水を入



れてそれを使っていた。こんな紡ぎ方は緯糸。絹糸を経糸にした。

糸は竹のカゴグワーに入れた。また、ピラと言う四角い箱（注24）があって、蓋まで閉



(図7) 撚糸

まるようになっていた。これは大工さんに板で作ってもらっていた。うちには昔お婆さんのものがあつたので、それを自分は使ったよ。

経糸はモミヤマの先にかけてブンブンと回し(図7、注25)、管に巻きながら蚕のように細長く丸い形をしたフナを作った(図8)。

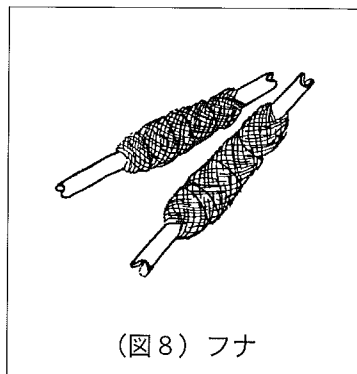
モミヤマは竹で大工さんに作らせた。フナを通すものも、これは杵に穴を開けて、フナを掛けて、10本か9本位の糸をザーラ、ザーラと引っ張る(図4)。道具にはプヌスとピャがあつた。ピャは経糸を入れるもの。

プヌスは櫛状になっているもの(図2)。

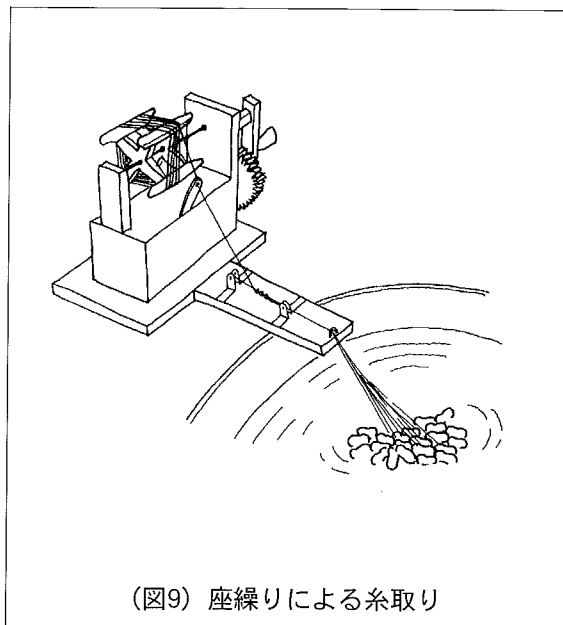
模様は、経模様や緯模様をやったりしたたよ。緋は織りなかつた。経と緯しかできなかった。

色は、染める物を買ってきてから染めたはず(注12)。昔の人はフクギ(写真4)を使つたって。

機織りが終わったら、アーフ(灰汁)で洗って干したよ。芭蕉はもうこれが一番であつた。米の砥汁もためて置いてから、これでも洗つたよ。



(図8) フナ



(図9) 座繰りによる糸取り

学校卒業しても、ここでは何もお金なすものも無いでしょう。蚕を養ってから繭ができたならそれを大和(日本本土)に送つたたよ。二子の繭などは自分で糸に使つたりしたよ。繭を鍋で煮たら、糸口が出てきて、それを座繰りで集めて糸にした(図9)。成虫になって飛び出して穴の空いた繭などは、藁でグルグルすると糸口が出てきたよ。二子の繭は、お湯で炊いて真綿にして丹前を作つたよ。

聞き書き 2 (西本テル：大正13年生／富嘉部落)

高等科の頃、ハトマヤーという親戚のおじさんが(東部落)、機織りしていらっしゃったんですよ。うち「機織りたい。」と言ったら、「じゃあんた手伝いに来てくれないか。」と言うことになって習ったんです。学校卒業してもおじさんの手伝いはしていました。でも、この家に嫁いできてから自分で初めて本格的に機織りをやるようになったんです。

子どもは爺ちゃん(舅)にあずけて蚕を養ったね。山の中の桑の葉を採ってきたり、蚕を養わない家の桑(写真10)を相談してもらったりして、蚕を養い、糸を自分でとって機織りしました。糸の取り方は、ハトマヤーに蚕の繭を持って行って習いました。



(写真10) 桑の木

ハトマヤーは蚕の糸取りだけでなく、芭蕉もやっていた。芭蕉はね、一人でやるのがなかなか出来ないからさ、夜はさいて置いて、昼は畑に行かない婆ちゃん達(舅の姉妹)五、六名呼んできて、紡いでもらった。これで、家族の畑に着ける夏物を、自分で縫って着けさせていたんですよ。

芭蕉はあっちこっちにの畑にありました(写真1)。今でも、この村のすぐ前、池の側にたくさんあるでしょう。うちは分家ヤーだから、土地もそう無いし、あれを刈ってきたり、人の家の芭蕉を貰ったりしたよ。

冬夏関係なく芭蕉の糸取るのはいつでもできる。でも、夏というのは、農民は冬忙しいでしょう。だから、夏しかできないわけよ。1m50位になったら刈って、上の皮は二、三枚剥いで、鎌でサーっと一枚づつこんなに裂いて置いた。また(芭蕉の)中の腸は採って捨てた。(裂いたものは)木灰の汁で炊いてよ。木灰はソテツの葉でなければ、どんな木でも燃やして使った。皮がある程度ビリっとしたらね、夜光貝でこんなに摩って、皮剥いだよ(図5)。

(繊維を裂いたら)、糸を紡ぐ時は、根の方は根、先のほうは先、こんなに並べて置いたんですよ。こうすると、夜でもランプの明りで紡がれたんですよ。紡ぐ時は、糸を結ばないで、捻ってやったんです(図6)。プー(苧麻)やるのといっしょです。芭蕉の糸を紡ぐ時には手の先がビリビリするから、灰を付けてやったんです。

あの頃は子ども寝かしてから、夜遅くまで起きて、芭蕉を裂いて置き、雨降りの時など、

婆ちゃん達を呼んできて、紡がせたんです。

紡ぐ前に、丸く糸を巻くのはフナとが言って、こんな竹にグルグル8の字にして回しておった(図8)。モミヤマというのものもあるしよ。また芭蕉はモミヤマに掛けて回さないと(図7)、(箴や綜統に)糸が通されないさね。織ることもできないし。

糸の染めは、染粉(注12)買ってきて、黒や黄に自分で染めた。芭蕉は黄色くしているので、ほとんど模様は入れないで、夏の上着なんかは、そのまま白生地を着けておったんですよ。

模様は縞、経か格子か緯かといったもので、緋は織らなかった。こっちは人は、あんなの(緋模様)織った人いらっしやったかね。また、それから、手の回らない時には、芭蕉ではできないと、糸を石垣から買ってきね。経糸はそれで、緯は芭蕉でやったりしました。

波照間の年寄は、地機(図1)を使っておったんです。だけど、ハトマヤーのおじさんから高機(図2)を教えてもらったもんだから、うちなんかはもう地機は使わなかった。

機織り機はうちの爺ちゃんが(西本光吉/明治23年生)作ってくれた。竹で作ったモミヤスはとてもきれいだったよ。ピヤー(図2)も自分で作ったよ。ピヤーって糸通すのがあったでしょう。プヌス(図2)の前に二つ上と下になるもの。こっちは人はこれをピヤーと言っていた。プヌスは櫛みたいにして、パタンパタンするもの。これは石垣から買ってきた。緯糸が入っているものはビスキ(図2)。

(整経する時は、手の指の間に糸を挟むけれど)四本でピトゥティーと言っておった。四本の十回でピトゥスマーリ(注26)。そうだったと思うけどね。

プー(苧麻)はやらなかったんです。プーはね、作りもしない。

蚕は買う人が 石垣からいらっしやたんじゃないかね。

蚕の糸を取る時は鍋で煮て、糸口が出ると、藁の先または薄の花でもいいし、それをこんなに回してとったんですよ(糸口をすくって取ること)。(その後は)座繰りでずーっと取りました(図9)。それをまたモミヤマに掛けた(撚糸/図7)。糸はパリパリしていて、下げて置いて乾かしたら、一年立とうが、二年立とうがね、粗末にさえしなかったら大丈夫だった。

一年で、一反しか織れなかったよ。自分で紡ぐでしよ。また、もっぱらこれだけだったらね。だけど、あの時は田圃や粟も実際に作っておったもんだからね。

また、やりたくはあるよね。今でもね、うちと協力する人がおれば、やりたいという気持はあるんですよ。

聞き書き 3 (新盛ひさ子：大正14年生／前部落)

婆ちゃん（山田ヒサ：明治22年生／90歳で亡くなる）が機織りをしていたので、その手伝いをして習った。機織りは疎開する前までやっていた。

ブー（苧麻）は屋敷内には植えられていなかった。別の畑（今の学校の所）にあった。ブーは花が咲かないうちに刈る。そして、貝や庖丁の折れたものとか使って、しごいて皮取ってよ（図5）。（茎の）皮がブーだよ。（茎の）中はほね（空洞）だからよ。剥いでとって、乾かして、きれいに置いてからよ。糸にしたさ。

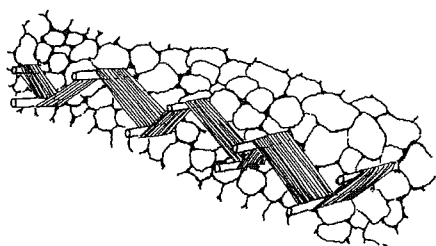
芭蕉はまたずっとあっちの畑で作った。そこで倒してからまた、きれいに分けて、灰汁で炊いた。引く（しごく）のは、また、庖丁の破れものや貝でもやったよ。芭蕉の糸は、

繋ぎはしなかったよ（注23）。こんなに合わしてからクチュクチュッと捻ったよ（図7）。ブーもあんなにがやったよ。芭蕉を捻る時は、手がスルスルスルするから灰もつけてやったさ。

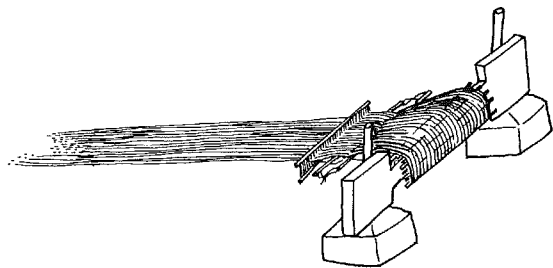
着物の長さよ（整経）。あれも木で作ってから回してやったよ（図3）。道具は誰が作ったか分らない。婆ちゃんの昔からのものがあつたかもしれない。

（経糸を引っ張るのは）こっちで（石垣で）していた（図10）。また、巻く時は（経糸巻取り）、こんなに長く伸ばして昔の石臼で引っ張ってからは巻き巻き（図11）、山田の婆ちゃんはそうやっていたよ。

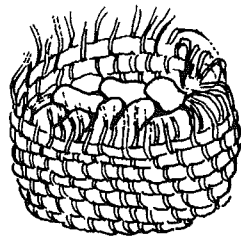
蚕飼うのは自分の家で養ったさ。（蚕棚が）いっぱいあってから、寝る所も無かつたよ。桑は家で育てたけど、今はもうみな倒したよ。



（図10）糊付けで経糸を引っ張る



（図11）経糸巻取り



（図12）繭を入れる籠
※聞き取りより作図。

育てた繭は石垣へ送った。傷物と二つ玉は自分達の着物に作った。繭を入れる物は薄を切って編んで作った。(編んだ先を折って、そのまま蓋にする。それにさらに、十字に藁を掛ける／図12)。

聞き書き 4 (新川ハツ子：大正15年生／前部落)

(機織りは)母と一緒にやっており、私は昭和38年頃まで織っていました。婆さんは糸作り等手伝ってくれました。学校におった頃は手伝いもしなかったんですが、この第二次世界大戦が始まって思うように衣類が買えなかったもんですから。戦争中、買物は切符制だったんです。切符も地方は60点で、反物一反買ったなら30点ですからね。それに縫い糸もタオルもみな点数に入っていましたので、一反買ったなら30点しか残っていません。また、切符持っていても買えなかったですよ。それで、その頃から始めたんです。

染めには色々使いました。ハマシタン(注27)ですね。黒みがかったような茶色ですよ。フクギからも。フクギは黄色。もう一つ和名は分かりませんが、ブガキ(注14)と言っています。あれも黄色です。食べられない実がなります。藍も自分達で作っていました。町営住宅の側のうちの畑にありましたが、もう無くなっています。トウエーと言っていましたから、たぶん中国から来たんじゃないかと思います。葉っぱはギンネムみたいな、豆科植物ですね。刈って水に浸けて、腐らせて石灰を少し入れました。カメに入れて作りしました(注16、17)。

泥にも染めたんですよ。昔、井戸の側はみな田圃でしたから、そこで、茶色に下染めの後、泥で染めたんです。染めた後は井戸水に晒しました。

(植物が)たくさんあるから染料になります。フクギの色は薄い黄色でしたね。ブガキというのは少し橙が混じったような色になりますね。ここで、お盆にムシャマ(注28)がありますよね。その時のミルクの着る着物は、ブー(苧麻)で、そしてフクギで染めていたんです。今は、みんな買ってきて付けています。ツカサ(注29)の着物も、昔のものはブーでした。

その頃から、みやこ染(注12)がありましたから、それも石垣から買ってきて使っていました。木綿糸も戦前には石垣から買ってきました。シルケット(注30)と言って経糸に使いました。どこで買ったのか分かりません。その頃は一週間に一度か、多くて二度ぐらいしか船が来ないものですから、船員の方に頼んで買ってきてもらうんです。

糸芭蕉は畑がありました。今もあっちこっちに残っていますよ。

ブー(苧麻)も屋敷中でなくて、それも畑の側に植えてありました。ブー(苧麻)は一年に三回から四回は刈ったでしょうね。しごく道具は、貝を使ったり、また金属、鉄(細

長い四角の鉄で長さ15～20センチ位、幅4～5センチ)の道具がありました。庖丁のかけらみたいなものでしたけど。

プー(苧麻)の糸を取ったものは、木で作った四角い箱(注24)に入れていました。あれはペラと言っていました。籠はクロツグか竹の皮で作った物がありましたが、何と言ったか分かりません。

経糸にする時は、ムミヤマがありますので、それで、やって(ブルンブルンと回して撚糸して)から(注25、図7)、緯糸はそのままフナ作って使ったんです。

経糸を整経する場合、以前は、工と言う字みたいな道具に糸を掛けていました(注18、図3)。カシカケの踊りがありますね。その大きい物。これはピスネーと言っていた。戦後には作られてないと思います。

(四角の枠に釘が打たれていたものは)道具は(注19、図4)、後になってからですね。経糸を引っ張る時は、みんな石垣に棒を通して、糊付けした糸をそれに掛けて引っ張っていた(図10)。ここでは麦も作っていたものですから、小麦粉を炊いて、糊を作って、それでやっていましたね。

糸巻きも長く引っ張って道端でやりました(図11)。

高機も地機も両方使っていました(図1、図2、写真8)。でも地機は、私達は使わなかったんです。婆さん達だけです。芭蕉を経にする時はそれで織っていました。後からは高機でも織りましたけどね。

模様は縞。緋はあまり作っていませんね。でも、蚕の糸は緋も作りました。母がやっていたので手伝いました。緋は木綿の糸で縛って作りました。緋の模様は「井」と二つ並びの少しづらしたものがありません(注34)。

上納の事については、詳しいことは婆さんから聞いていないんです。上納は緋ではなく、白生地。検査の後、出来が良くなかったら、返されたようですね。

蚕は養蚕組合がありましたから、そこから卵をもらってきて育てていました(注33)。私がずっと小さい頃から蚕を飼っていたんです。悪いもの(二つ藪など)は、手で引いて糸を取りました。

芭蕉は炊いたりたいへんですが、糸にしてからは、プー(苧麻)より芭蕉の方が織りやすかったですね。芭蕉は糸が長いけれど、プー(苧麻)はそんなには長くできなかったから。緯糸は、水に浸けて濡らしてから織っていました。それは蚕も同じでした。糸を柔らかくする時は灰汁を入れて煮たりしましたが、仕事着の場合はそのまま織っていたんです。

材料を準備して織るのも大変ですが、それだけじゃないですからね。畑仕事の合間にですから、母と二人で芭蕉もプーもみんな合わせて一年で10反ぐらいがやっとでしたね。

聞き書き 5 (仲底 信：昭和6年生／名石部落)

その当時（戦前）の人はみなもう着物が手に入らないから、自分で織っていたね。姑さん（仲底ナエ／88歳）も婆ちゃんも、里の母（波照間ヒヤカ）もね、やっていたと思うけど。蚕もやっていた。芭蕉もね。

蚕は鍋にお湯入れて炊いて、何かでかき混ぜてたくさんの繭から糸をこんなに集めて、座繰りでグルグル回して糸を取って（図9）、切れたら継いで、またやりやりしたね。

以前は地機でなかったかね。自分達が機織りするのは高機であったね。道具は買ってきたのか、こっちの大工さんが作ったのか分らない。

芭蕉は昔から植えた所があったはず。うちの母は、自然に生えた所から斬ってきて、灰汁（灰を水に浸けた上澄みの水）で、炊いたんでないかな。芭蕉を倒したら、外側から剥いで、糸の繊維だけ取ってからね。芭蕉はこんなに丸くしているでしょう。外側は捨てますよね。真ん中の丸いのが出るまで皮を剥いでからね、真ん中のは取って捨ててた（注8）。次は、炊いてから鉄の刀か何かでしごいて（図5）糸にしていたと思うけどよ。

しごいたものを、裂いてから、手でつないでいったさ。後でまたヤーマで撚り掛けてから、小さい竹に丸く巻いたんじゃないかな（図8）。

そして、蚕の糸の時は、何かの木の皮で染めて経縞や緯縞、碁盤を作ったりした。専門でないから緋はやらなかったね。芭蕉はもっぱら無地。そして、爺さんなんか短い紐つけて、畑に着ていらっしやった。芭蕉の時はまた、昔田圃だった所とかに突っ込んで浸けたりもした。お盆のミルク（注28）の着物は、ヤクンカミドゥガマ（注31）が、ハテルマアオキ（注14）の皮を取ってきて、お盆前になったら染めていた。

ブー（苧麻）も作っておった。波照間は昔から、娘が嫁いで行く時に石垣で積まれたこんな小さいブー畑を分けてもたせた。だから、こっちは誰々のブーの畑というのがあっちこっちあったそうだ。

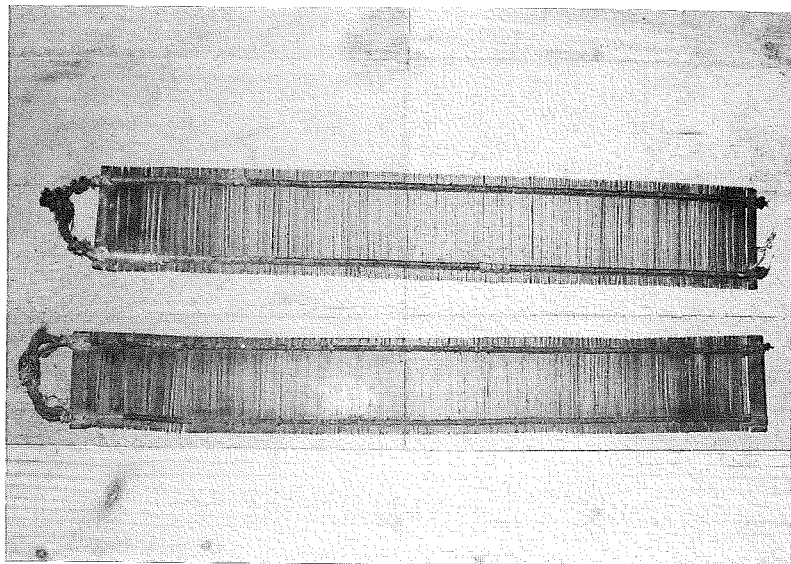
聞き書き 6 (前田盛菊江：名石部落)

これは、私が自分で蚕を養って作った真綿です（写真3）。戦後すぐですから、四十年余ります。自分の結婚式の時に布団に使って、それからまた、長男が生まれて、赤ちゃんの布団を作った残りです。機織りの糸は繭から。真綿からは糸にしませんでした。

婆さんは（仲底イツキ／明治23年生）地機（図1）。うちの母はもう高機（図2）でした。婆さんがやってるのを手伝ったりして機織りは覚えました。糸を（綜統や箴から）抜いたり、織ったりして。ブー（苧麻）も、少し婆さんのいたずらして紡いでみたり。

模様は経に入れたり、緯に入れたり。色は西表から染める葉（注12）やフクギの皮とか

で染めました。ミルク
(注28)の着物はブガキ
(ハテルマアオキ)で染め
た。フクギの皮は真黄色。
ブガキは少し赤みがかった
黄色。それをまた、泥
に一晩浸けると、少し茶
色っぽくなる。緋は作っ
たかな。婆さんが、蚕の
糸で織った布を内地に送
って紅葉の模様つけても
らったのが一枚ありまし
た(注32)。



(写真11) 箴 (プヌシ)

機の道具は、島の大工さんが作っていました。他はみんな処分したけれど、プヌシ
(箴/写真11)だけ残してあります。曾祖母さんの頃から使っていたのではないかと思うけ
ど、婆さんが使っていたのは覚えています。荒いのと細かいのがあるでしょ。両方とも芭
蕉の着物用です。風呂敷を織るような広幅のものもありました。

仲底イツキの長男の善祥(明治37年生)が養蚕組合作って組合長していた。山田シゲさ
んが事務員をしていた。はっきり覚えていなけど、昭和だったと思う。戦争が始まる頃ま
ではやった。石垣の方から卵を送って来て、あれを孵してね。一番座も二番座も棚作り蚕
養っていました。お金にするために上等の繭は集めて石垣に送りました。悪い繭は自分で
糸取って、機織りして。戦後も嫁いってから昭和33年頃までは蚕養っていました(注33)。

藍も甕に作りました。昔、トウ藍(注16)と言って葉っぱの大きい藍もあったけど、も
うこっちは見られない。台湾藍(注17)はまだ残っています。台湾藍は花咲かないうち
に、40cmから50cmぐらいになったら葉を刈って藍を作った。甕に葉を入れ、水いっぱい
に浸して、石灰入れて作った。石灰は屋根瓦の漆喰の為に、地元で珊瑚(ウール)を取っ
てきて乾かして焼いて作っていました。

聞き書き7（山田シゲ：大正6年生／前部落）

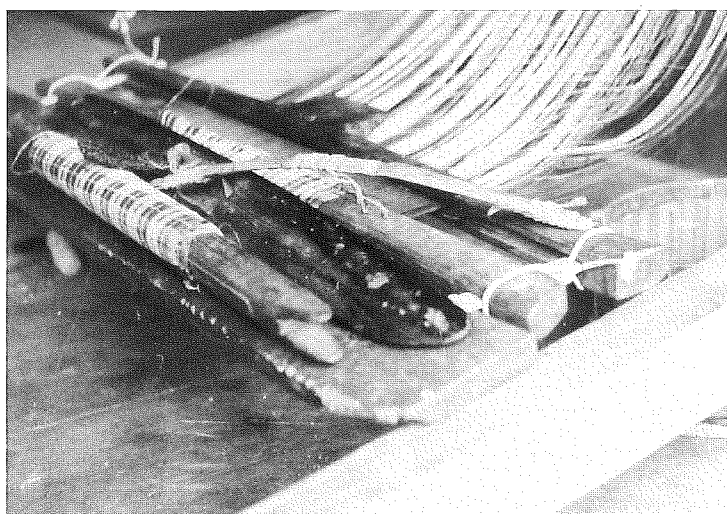
仲底さんが「あなたは事務的にできそうだね。」と言われて、卒業後と思うけれども、頼まれて一週間ぐらいかな、当時の瓦葺きの公民館で養蚕組合の手伝いをしましたが、詳しいことは覚えていませんね（注33）。

その当時は、うちのお姑さん（山田ヒサ／明治22年生）なんかが芭蕉取って紡いで着物にしたりしていました。うちはただ農業に精を出すだけで手伝いもしませんでしたね。

人頭税については、聞いたことはあまりないですね。うちの里のお婆さん（前津ナヒ／慶応3年生か）から、この今の公民館でね、反物とか米とか一所にまとめていたということは少しは聞いた覚えはありますがね。その婆さんは今居られたら150歳位かな。その方も人の話を聞かれたのか、また自分の事だったのか分かりませんが。

藍と言うんですか、糸を染めた話しも聞きました。姑はとても手が器用な人で、自分で染めて、地機で緋の様なものも織っていたんですよ。井の字みたいな模様でした（写真7／注34）。それは、ブーと、蚕の糸でしたね。

染めた後、海に行くといったかな（注6）。海水に流してなんとかと話していたと思うけれど、はっきり覚えていません。



（写真12）地機の部分（1960年頃）

(注1)「李朝実録抄」『日本庶民生活史料集成 第一巻』第一書房より p585

一、麻・木綿無し。亦蚕を養はず。唯々苧を織りて布を為る。作衣は直領の如くして領及び襷積無し。袖は短くして瀾し。染むるに藍青を用いてす。中裙は白布三幅を用ふ。統べて臀に繋ぐ。婦の服も亦同じ。但々内に裳を着して中裙無し。裳も亦青を染む。

～ 中略 ～

一、布を織るに箴・杼を用ふ。模様は我が国と同じ。其の他の機械は同じからず。升数の麤細も亦我国と同じ。

(注2)「与世山親方八重山島規模帳」(乾隆33年)／「翁長親方八重山島規模帳」(かん豊7年)／「翁長親方八重山島諸締帳」(かん豊8年)／「富川親方八重山島規模帳」(同治13年)『沖縄県史料 前近代6 首里王府仕置2』1989年2月

「富川親方八重山島御用布座公事帳」／「富川親方八重山島諸村公事帳」『沖縄県史料 前近代7 首里王府仕置3』1990年

(注3)「与世山親方八重山島規模帳」(乾隆33年)『沖縄県史料 前近代6 首里王府仕置2』1989年2月 より

芭蕉植付様之事

(注4)「富川親方八重山島農務帳」(同治13年)『沖縄県史料 前近代6 首里王府仕置2』1989年2月より

農事手入之事／藍仕立ならび製法之事／芭蕉植付様之事

(注5) 富川親方八重山島御用布座公事帳『沖縄県史料 前近代7 首里王府仕置3』1990年2月より

一諸事勤之事／一諸道具之事／一御用布取納之事／一御用布調方之事／一諸御用布櫃入ならび布丸之事／一御用布立長定之事／一御用布疋反長幅定之事／一毎年御用定之事／一御用布取納尺之事／一諸帳出日限之事／一勤星取立様之事／一定納布ならび御用布名定之事／一御用布貫ふとき目ならび長定之事

(注6)「富川親方諸村公事帳」より

一藍遣人之儀御用布かせ貫取調部染調方相働候也／一布晒人之儀御用布織取次第干晒方相働候也 ～略～ 一藍遣式人正女／一布晒式人正女／右竹富島新城小浜波照間四ヶ村壺村付

(注7)「李朝実録抄」『日本庶民生活史料集成 第一巻』第一書房より p594

草有りて芭蕉の如し。大なる者は棟柱の如く。之を刈りて外皮を去り、肉皮を取りて三等の布を為る。皮の内外を以てして布の妍細異なる。其の最内の者は極めて細潤を為し色潔にして雪の如く、妍密無比なり。女服の良き者は、此を以て最

と為すと云う。

(注8) イトバショウ (*Musa Lukinensis* Makino) の事

(注9) 苧麻 (ちょま)。和名カラムシ。学名*Boehmeria nivea* Gaundich, f. *viridula* Hatusima。方言ではブー (八重山地方)、ウーと呼ぶ。

(注10) 「沖縄之蚕業」『沖縄之農業』沖縄県 昭和7年 より P665~P667

(注11) 「沖縄縣八重山嶋統計一覽略」より (明治25年/沖縄県立博物館蔵)

戸数	人口	田	畑	藍	苧布	木綿布	芭蕉布
126	665	596,222歩	2,974,001歩	4,529斤	137反	249反	383反

(注12) 硫化染料か。薬局で販売され、昭和50年代初めまでよく利用されていた。

(注13) おとぎりそう科の常緑小高木。和名フクギ。学名*Garcinia subelliptica* Merr。防潮、防風、防火林として、また建築材としても使われる (『沖縄植物野外活用図鑑』新星図書出版 昭和54年)。黄色の染料が得られる。

(注14) ヤエヤマアオキはあかね科の植物。学名は*Morinda citrifolia* L。樹皮から赤色、根から黄色の染料が得られる (『沖縄植物野外活用図鑑』新星図書出版 昭和54年参照)。聞き取りではハテルマアオキと呼ばれていた。

(注15) 媒染剤とは繊維への染料の染着を媒介する薬剤のこと。木灰はそのアルカリ性分が田泥は鉄分が媒染剤としての役目を果たす。

(注16) トウ藍 (エー) は琉球藍のこと。爵床科の多年生草本で、中国原産。琉球列島からインドシナ半島に分布。学名は*Strobilanthes flaccidifolius*, (Nees.)。 (『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983年 参照)

(注17) 台湾藍はタイワンコマツナギやナンバンコマツナギなどの植物から採れる藍のこと。インドアイの名で知られる。

(注18) 経糸を整えるための道具。縦二尺五寸、横三尺。方言ではカシギー (宮古)、ピナシ (竹富島) と呼ばれ、沖縄全域で見られる。同型の道具は台湾のパイワン族でも見られる (田中『沖縄織物の研究』紫紅社 昭和51年 P154~P155)。ラオスでは紐を作る道具として使われる (柳悦州氏談)。

宮古島では昭和50年代頃まで使用されている。

(注19) 明治末期に本土より移入された経糸を整える道具で綜台 (ヘダイ) と呼ばれるもの。現在も日本全国各地で見られる (田中『沖縄織物の研究』紫紅社 昭和51年 P155)。足の付ついた台形式のものと、枠のみで壁に立て掛ける形式のものがある (柳悦州氏より)。

八重山地方では立て掛け形式のものが使われ「カシカキヤマ」と呼ばれている

(宮城文『八重山生活誌』P61、62)。

- (注20) 櫛状の資料について、1893年来沖した笹森儀助が『南島探検』(1894年)で、与那国島において同形の資料を確認している。それについて田中俊雄が「笹の遺物ではないか」と見解を述べている。ただし、田中は実物を確認していない。(『沖縄織物の研究』紫紅社 昭和51年 P142)。
- (注21) 沖縄で、学制(1872年)に定められた初等教育が出発したのは1880年。この制度は、1886年の「小学校令」により尋常小学校(4年、義務制)と高等小学校(4年)に改称。1941年には国民学校となる。(小学校『沖縄大百科事典』p411より)
- (注22) 喜如嘉の芭蕉布でいう所の「苧引き」の作業のこと。(『芭蕉布と平良敏子』沖縄県立博物館 1993年 P20)
- (注23) 沖縄本島では芭蕉の糸を機結びで繋いでゆく。(『芭蕉布と平良敏子』沖縄県立博物館 1993年 P21)
- (注24) 紡いだ糸を入れる容器には竹や藁草を編んだ簞と板作りの箱状の物が見られる。簞は地域によってウーパーラー(首里等)、ウンゾーキ(大宜味)、ウーマグ(国頭)、ミーディル(池間島)、ウンゼ(沖之永良部島)等の呼び名がある(沖縄県立博物館 民俗展示室より)。箱状の物は、蓋付きの丸形(久米島)と方形(八重山)が見られ小物を入れる引出し付きの箱は、スクイと呼ばれる。波照間では木箱は「キーペラ」、簞は、「ガイジペーラ」と呼ばれる。(上江洲均『沖縄の民具』慶友社 昭和48年)
- (注25) 撚糸はJIS紡績用語によると「一本または二本以上の糸にヨリをかける操作で、ヨリ糸ともいう」
- (注26) 糸1本は「ヒトスジ」。その四本を「ヒトティー」と言う。その10回「チュティー」の40本で、「一ユミ」となる(八重山)。人間の片手の指に挟める4本がその基本単位となったと考察されている(田中俊雄・玲子『沖縄織物の研究』紫紅社 昭和51年 P142)。波照間島ではピトゥティー(4本)、ピトゥスマーリ(40本)と言う。
- (注27) みそはぎ科のミズガンピのこと。学名Pemphis acidula J.R. & G. Forst. ハマシタンは方言名。
- (注28) ムシャマは旧盆7月14日に行なわれる波照間島最大の祭り。島全体が東、前、西の三つの組に分かれ多彩な民俗芸能がくり広げられる。朝、夕にミルク(弥勒)を先頭にした道行列が行なわれる。
- (注29) ツカサは宮古、八重山地方における神女の一般的呼称。沖縄本島のノロにあたる。
- (注30) シルケット加工とは苛性ソーダ濃厚液の化学的処理により、綿繊維に絹艶を与える加工のこと。JIS繊維用語「セルロース繊維製品をカセイソーダの濃溶液で

処理し光沢などを与える加工」

(注31) ヤクンドウカミドゥガマとは、ムシャマの祭りの際の役割分担のことで、ミルクの衣装を整える人のこと。ミルクの衣装は前部落ではフクギで染められ、名石部落ではブガキ（ヤエヤマアオキ）で染められている。

(注32) 「織った絹布は、各家でも染色したが、殆んど京都から来島する行商人に頼み京染めにした」（『沖縄民俗 第10号』（竹富島／座間味島／喜屋武部落）琉球大学民俗研究クラブ 1965年』P37）

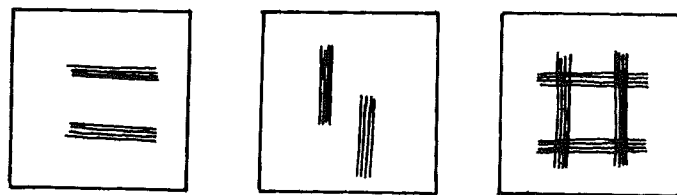
「友禅に染めて美しい柄の帯地、着物地となし」（宮城文『八重山生活誌』昭和47年 P90）

(注33) 八重山における養蚕は、1815年、粟国島から石垣善全によって蚕種と養蚕法が伝えられたことが初見と言われているが、それはうまく浸透せず自然消滅している。その後明治27年、八重山島役所時代の勸業主任中島兼次郎が郷里の鹿児島から蚕種を取りよせ養蚕を指導したのが八重山養蚕業再興となる。大正14年頃から昭和5年頃にかけて全盛時代を迎える。昭和6、7年頃、繭値の下落を契機に、郡農会を発足させ、製糸会社瑞泉社に加入し普通蚕に原蚕飼育を始めたり、繭乾燥場が設置するなどの動きがある（宮城文『八重山生活誌』昭和47年 P90）。

竹富島においては、明治34年、鹿児島より中座政太郎（竹富島巡查）が蚕種を持って渡来したのが、養蚕の始めとなる。繭のまま御倉蚕糸工場へ販売されている。（『沖縄民俗 第10号』（竹富島／座間味島／喜屋武部落）琉球大学民俗研究クラブ 1965年』P37）

波照間島で養蚕組合ができたのは、昭和12年以後のこと。仲底善祥氏（昭和12年、初代波照間郵便局長）が組合長をつとめる。（新川ハツ子氏より）

(注34) 1690（康熙29）年の参遺状に「御用布之内 上布 下布迄崩かうし色々かすり之数六ヶ敷・・・」（『石垣市史叢書8』p18参照）とあり、沖縄での文献上における具体的な絣模様についての初見となる。宮城文は『八重山生活誌』で「ジュウムンジ（+）、キタ（□）、ターフ（田）、タティンガシリ（|）」等が最初に織られた絣だと述べている。



（図13）絣の模様